Color Science Association of Japan

色彩考古学の勧め

An Invitation to Color Archeology

志賀　四郎　　色彩考古学研究所　　Shiro Shiga

私が日本保安用品協会専務理事だった当時の主な仕事は、労働安全・衛生保護具や交通災害防止用品のＪＩＳを作って、その普及発達を図ることであった。労働者用の黄色い安全帽、オートバイ用の赤いヘルメット、自動車用のシートベルトなどのＪＩＳ原案は私が作成、今、ヘルメットやシートベルトを着用しないで車を運転しているのを見つかると、減点１点、それが合計６点になると免許証が取り上げられることになり、皆さんに迷惑を掛けているが、悪いことばかりやっていた訳ではない。私が一番精力を傾け、楽しんで作業したのは、安全色彩関係のＪＩＳ作りであった。元東芝科学館長東尭氏を委員長に、日本色彩研究所の関、川上、細野、見玉各理事、大島正光、関亮先生等の御協力により安全色彩関係のＪＩＳだけでも１３規格ができている。

そんなことが私の本学会の名誉会員に推薦された理由だと思うが、想い出すことは、一番最初の安全標識板のＪＩＳ原案委員会の席上、危険色と防火色をどうするかで意見が分かれたとき当時アメリカ最高のカラーコンサルタントであったＦａｂｅｒ　Ｂｉｒｒｅｎ氏に私が手紙で問い合わせたところ、ビレン氏は、夕方になると一番先に見えなくなる色は赤であること等の理由を上げ、危険色は黄赤、防火色は赤とすべき旨述べ、かつ、アメリカ海軍造船所の色彩調節マニュアルのほかに同氏永遠の名著と云われるＣｏｌｏｒ　Ｓｙｃｈｏｌｏｇｙ　ａｎｄ　Ｃｏｌｏｒ　Ｔｈｅｒａｐｙ　を一面識もない私に航空便で贈って呉れたのであった。以来、３０年間に亘るビレン氏と私の親交は続いたが、その「色彩心理学と色彩療法」を読んでみると、これが頗る面白い。その初めの４章ぐらいは、ここでいう色彩考古学というべきもので、私は、以来、色彩の魔力に取り憑かれ、１９８６年に副会長の職を後進に譲り、顧問となるとともに、長年の念願の仕事　色彩考古学の研究に打ち込むことになったのである。

色彩考古学研究所設立についてはニューヨークに行ったときビレン氏に相談すると「君ならそれが出来る、喜んで協力する」と、顧問就任もＯ．Ｋしてくれたのは嬉しかった。手初めに８７年１２月エジプトに行き、カイロ博物館、ルクソール、アブシンベル神殿などを見て廻り、寔に、エジプトこそは色彩考古学の宝庫だと感じ、色考研設立の自信を得たのであった。折も折、ビレン氏の最後の著書Ｓｙｍｂｏｌｉｓｍ　ｏｆ　Ｃｏｌｏｒ　が贈られてきたので、早速その翻訳出版のお許しを得て翻訳にかかったが、新聞などを読むのに辞書の要らない私の英語力をもってしても解らないことが余りに多いことを発見した。その原因は、私が世界の三大一神教たるユダヤ教・キリスト教・イスラム教のことをほとんど知らないということにあった。それは恰も日本の考古学者が古事記や魏志倭人伝を読まずに邪馬台国は九州か近畿かを論ずるようなものであることが段々解ってきたのである。これはどうしても三大一神教の聖地エルサレムに行くより外はないと考えた。

丁度その時分、わが師にして友なるビレン氏がその「色彩のシンボリズム」を上梓して間もなく、８８歳で天寿を完うしたとの知らせが入った。私の心は云いようなく悲しみに包まれたが、この上は一日も速く翻訳を完了しなければならない。幸い、長男が大蔵省から出向して駐英大使館参事官になったので、昨年６月ロンドンに行き、最初の１週間は大英博物館に日参して資料を集めた。その収穫の一例は、エルギン卿がアテネから将来したパルテノン神殿の彩色である。同神殿は、現在は大理石の色そのままだが、紀元前４３３年落成した当時は極めて華やかな色彩で塗粧されていたのであって、図１は、メトロポリタン美術館に展示されていたアテナ・パルテノス（処女のアテナ）のミニチュア像であるが、ビレン氏はその著　Ｎｅｗ　Ｈｏｒｉｚｏｎｓ　ｏｆ　Ｃｏｌｏｒに「女神像は、金と象牙でおおわれ、周辺の荘厳具や列柱はすべて極彩色に飾られていたが、これらの色彩は多分にエジプトの影響下にあった」と書いている。表１はパルテノン神殿はこのような色で塗られていたという色名とそのマンセル値である。

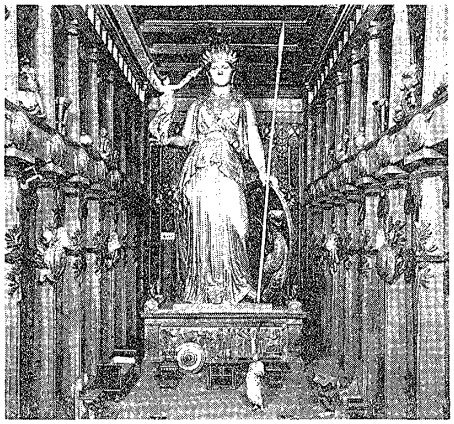

図１

NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan

表1. 古代ギリシャ人のパレット

Ivory white	7.5YR8/2
Scarlet	5R3/10
Star blue	10GY4/10
Mist blue	7.5B7/4
Pale malachite	2.5YR7/2
Marble pink	2.5YR7/2
Sun yellow	5Y8/8

ロンドン滞在1週間後、私は伴に連れられてイスラエルとトルコを遊歴した。第一日は、エルサレムでユダヤ人の嘆き祈る「嘆きの壁」，イスラム寺院「岩のドーム」、キリストが十字架を背負って歩いた「悲しみの道」を経てゴルゴダの丘に建つ聖墳墓教会に詣で、第二日はエリコ城址、死海文書の発見されたクムランの洞窟、エンガジでは死海で泳ぎ、ローマ軍に包囲されて960人が集団自殺したマサダ城、キリストの生誕地ベツレヘムを見て廻り、第三日は、ヨハネの默示録に出てくる地球最後の激戦地ハル・メギド（新約聖書ではハマゲルドン）、聖母マリアが受胎告知を受けたナザレを経て、ガリラヤ湖畔で一泊、翌日はアッコ、ハイファ、カイザリア、テルアビブ・ヨッフォなど地中海東岸の真珠の首飾りといわれる港町を廻り、当夜はテルアビブで半泊、夜中の3時にベングリオン空港からトルコに飛び、イスタンブルやトロイアの遺跡を廻って、帰ってきた。

トルコの話はまだ整理していないので、次の機会に譲ることとし、中国の話をする。

昭和58年12月、全中国総工会の招きで日中労働保護技術交流委員会第二次訪中団々長として、北京経由長沙に行ったとき、馬王堆漢墓を参観したいと述べたが、折悪しく何かの理由で閉鎖中で、軑夫人の遺体はもとより、その遺体を包んだ色彩豊かな絹の衣装を見ることも出来なかった。翌59年には、同じく第三次訪中団長として西安に行ったときは、秦の始皇帝（前256－210）陵から1.5km離れた所にある兵馬俑博物館を参観した。1974年に発掘された兵馬俑そのものは図2に示すように項羽の軍に建物を焼かれ、2千年の間に深さ5mの黄土の下に埋没してしまったので彩色も剥げ落ちているが、別棟の展示室には、その一体一体は入念に彩色されていた証拠品が並んでいる。図3は、射手の服装で、どんな色に塗られていたかを示しているが、もし秦時代の戦闘服がこのように華美なものであったとすれば、源平の合戦当時のわが国の鎧兜の美々しさも遠くここに先例があったと考えられた。この西安の兵馬俑も色彩考古学から研究すれば博士論文の一つぐらい出来る筈である。もっと早く色彩考古学を始めていればよかったと今さら悔やんでいる。

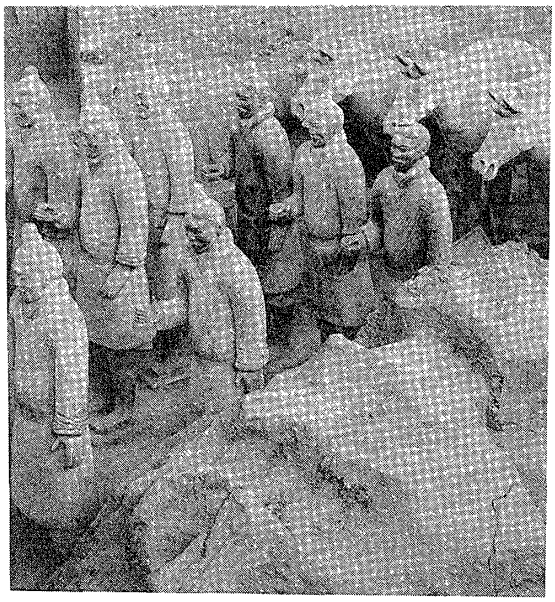

図2

色彩考古学研究所は昨年11月1日、東京芸術大学名誉教授小池岩太郎氏、色研細野尚志前理事長、兒玉晃常任理事ほか、同好の士11名（男6：女5）が集まって発会式を行ったが、当分の間、サロン形式、つまり会則も役員も会費も決めない、全く自由な集まりとし、ただ、名目上私が所長ということになった。さしあたり、やることは、文献収集ということになるが日本の色彩考古学だけでも、その労力は大変なものであるから、それは会員の選択に任せ、私は、今年のソ連、東欧旅行が実現すると、大体世界中を廻ったことになるので、外国部門を専門に担当することになろう。

最後に一言。高松塚、藤の木古墳、吉野ケ里遺跡など、最近は色彩豊かな遺跡が次々に発掘されているが、これらを色彩考古学の立場から探求することにより、日本の考古学上に、また日本の歴史の解明に新しい伸展があると確信する。

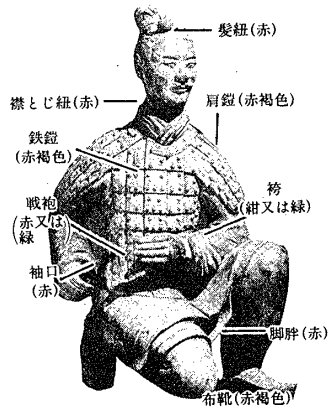

図3 射手の服装と彩色

NII-Electronic Library Service